

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008 ～ 2009

課題番号：20830091

研究課題名（和文） 近代ハンガリー所領経営者の企業者活動

研究課題名（英文） Entrepreneurial activities of the landowners in modern Hungary

研究代表者

高田 茂臣（TAKADA SHIGEOMI）

大東文化大学・経営学部・講師

研究者番号：30453666

研究成果の概要（和文）：本研究では、まず近代ハンガリー所領経営史の研究史を把握したうえで、その中から二つの代表的な農業地域であるドナウ河以西と大平原の個別所領を取り上げて検討した。とりわけ、穀倉地帯・ハンガリー大平原の所領発展メカニズムを再構成する手がかりを得るために、南部大平原に位置したカロチャ大司教、ヴェンクハイム伯爵家、パラヴィツィーニ侯爵家、カーロイ伯爵家の各所領の成立と展開について、先行研究に依りながら立ち入って検討した。

研究成果の概要（英文）：After I surveyed the studies of the business history of the large landed estates in modern Hungary, I investigated the large landed estates of Transdanubia and the great Hungarian plain that were two typical agricultural regions. Above all, for the purpose of making clear the whole image of the foundation and expansion of the estates in the great Hungarian plain, I investigated each estate of the archbishop of Kalocsa, count Wenckheim family, marquis Pallavicini family, count Karolyi family located in the southern great plain.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	660,000	198,000	858,000
2009 年度	180,000	54,000	234,000
年度			
年度			
年度			
総計	840,000	252,000	1,092,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：近代史、農業革命、所領経営、ハンガリー

1. 研究開始当初の背景

ハンガリーで 1850 年代から本格化した農業の市場経済化は、資本制生産への過渡期の「農業革命」であり、狭義の産業革命とともに、資本主義を体制的に確立させるもうひとつ

の要素であった。近代ハンガリー農業発展の基本線は、「アメリカ型」の対義語としての「プロシヤ型」であったとされるが、教会や大貴族諸家は、東部ドイツのユンカーのように自ら所領経営を行なうほか、イギリスの

土地貴族のように所有地の相当部分を資本家的借地に出していた。

マクロ統計分析が主流であるハンガリー農業史研究において、貴族諸家文書を活用した19世紀後半の所領の個別経営分析は手薄な領域であった。ハンガリーの既存研究では、マクロ的観点から当時の基軸産業であった製粉業と穀作農業とが相互促進関係にあったことが漠然と説かれるだけで、ミクロ的観点からそれらの関係を裏付けた研究は存在しないように思われた。

そこで、当該期農業を規定付けた穀作所領経営の発展について、ハンガリー資本主義（製粉業）との関連を意識しながら明らかにすることで、どのような農業経営が工業化を促進したのかという問題に答えることが可能になると考えた。

2. 研究の目的

ハンガリーの穀倉・大平原に軸足を置く所領経営を行なった大土地所有者としては、カロチャ大司教、ヴェンクハイム伯爵家、パラヴィツィーニ侯爵家、カーロイ伯爵家等が挙げられる。本研究の主要目的は、19世紀後半のハンガリー農業を規定付けた大平原穀作所領経営の発展メカニズムを事例により再構成し、所領オーナーの企業者活動を明らかにすることであった。

3. 研究の方法

まず、近代ハンガリー所領経営史に関する先行研究の再検討を通じ、これから取り上げる事例を分析するにあたっての視座を明確にした。その際、根菜類・飼料作物栽培を基盤にした集約的畜産の中心地域であったドナウ河以西の所領と、小麦生産が最も周密に分布する地域であった大平原の所領との間に見られる経営構造・経営行動の差異・共通点にも着目し、これから取り上げる事例との比較材料とした。2009年3月にはハンガリーへ渡航し、資料の探索・蒐集を行なった。2009年度は、ハンガリーから持ち帰った資料を元に個別所領経営分析を行なった。

4. 研究成果

(1) 2008年度は、近代ハンガリー所領経営史に関する資料蒐集のための準備研究と、資料蒐集そのものを主要課題とした。はじめに本格的研究に至る準備作業として、近代ハンガリー所領経営史研究の論点、研究史の流れを整理し、その中から二つの代表的な農業地域であるドナウ河以西と大平原の個別所領を取り上げて比較・検討した。つぎに、現地Webサイト・OPAC、メール交換等を利用した予備資料調査の結果、二次文献を包括的に所蔵する国立セーチャーニ図書館（ブダペシュト）と、「パラヴィツィーニ家ミンゼント＝ア

ルジュー所領文書」を所蔵するチョングラード県立文書館（セグド）を主な資料蒐集先に選定した。そして、2009年3月の現地資料蒐集の結果、二次文献の包括的な蒐集と一部文書館史料の蒐集に成功した。また、ハンガリー出張の直後に行なわれた第8回経済空間史研究会例会での拙著（『19世紀ハンガリーの産業革命—ハンガリー資本主義像の再検討—』大東文化大学経営研究所研究叢書、2008年）合評会によって、本科研費研究課題・研究目的（ハンガリー所領経営の生産構造の解明）の重要性を再確認することができた。

(2) 2009年度は、前年度にハンガリーから持ち帰った資料を元に個別所領経営分析を行ない、途中1度の学会発表をはさみながら、これまでの研究成果を3本の論文に取りまとめた。具体的には主にピアリスト修道会メルニェ所領、カロチャ大司教領、ヴェンクハイム伯爵家アカスト＝ヴェーストゥー所領、パラヴィツィーニ侯爵家ミンゼント＝アルジュー所領、カーロイ伯爵家ホードメズーヴァーシャルヘイ所領の成立と展開について、主に現地の先行研究に依りながら立ち入って検討した。得られた成果の骨子は、以下の通りである。

① 大貴族や教会勢力は、近代ハンガリーの政治、経済、社会において重要な地位を占めていた。農村住民の多くは全国に展開する彼らの所領に依拠して生計を立てていたし、所領オーナーは議会で議席を占めたほか、知事、閣僚や首相としても政治を動かし、また大銀行、大企業の重役会にも名を連ねていた。たとえば、ティサ地方鉄道会社は1857年、北部丘陵地帯の地主で製鉄業者のアンドラーシ・ジュルジュ伯爵のイニシアティブにより設立された。アンドラーシは同社の主要株主の一人となり、会長も務めた。また、親族で、グムル県の有力地主かつハンガリー最大の個人製鉄業者であった伯爵アンドラーシ・マノーは、1852年に設立されたリマムラーニ渓谷製鐵連合の主要株主の一人となり、さらに、グムル県の小規模鉄生産者を結集し1868年にシャルゴータリヤーン精錬会社を成立させた（1881年に両社合併してリマムラーニ＝シャルゴータリヤーン製鐵）。カロチャ大司教、ヴェンクハイム家、カーロイ家は地主金融機関・ハンガリー土地信用会社の監査役会に席を占めた。パラヴィツィーニ家のエドゥアール侯爵も、財務官僚からハンガリー土地信用会社監査役、ハンガリー総合信用銀行頭取、ガンツ鑄鉄・機械工場会長等を歴任した。彼らの社会権力の源泉は、所領からあがる収益であった。

② ドナウ河以西の所領研究は、後述する大平原の所領研究と並ぶ蓄積をもっている。まず、当該地域の教会所領の研究としては、シ

トー修道会のエルーサーラーシュ所領を取り上げたボドログ「エルーサーラーシュ所領における資本主義的経営の成立」(1966年)と、ピアリスト修道会のメルニェ所領を分析したトート『大領地から大経営へ—農民解放から第一次大戦までのメルニェ所領の経営—』(1977年)がある。ピアリスト会は、1597年にローマで結成されたカトリック系の教育を目的とする修道会であり、ハンガリーでは1642年から活動している。メルニェ所領は1806年にハンガリー・ピアリスト修道会の所有になり、教会経済力の基盤となった。所領はドナウ河以西中南部の4県にまたがり、ほとんどが借地に出されていた。自経営農場も、所領管理人に管理の全権が委任されていた。つぎに、貴族所領の研究としては、当該地域に軸足を置いていたエステルハーズィ伯爵家とバッチャーニ公爵家の研究がある。サバド『エステルハーズィ家タタ=ゲステシュ所領の転換—賦役制から資本主義的経営へ—』(1957年)は、最初の本格的な近代ハンガリー所領経営史のモノグラフであり、フュール『資本主義的経営に向かうチャークヴァール所領、1870—1914年』(1969年)は、前者から分岐した家系の所領経営を検討している。バッチャーニ家の研究には同一筆者によるデメテル「バッチャーニ・フュルプ公爵のエニグ所領における耕作(1806—1870年)」(1996年)と、同「エニグ所領の経営における牧羊の役割(1806—1870年)」(1997年)がある。

③ 他方、本研究の主対象である大平原の所領研究は、とくに肥沃な穀倉地帯であった南部大平原地方に集中している。まず、当該地域の教会所領の研究としては、M・ユハース「1890年代におけるカロチャ大司教領の経営」(1986年)がある。カロチャのカトリック教会は、初代ハンガリー王イシュトヴァーン1世による教会組織事業の一環として当地に司教座が置かれたことに始まる。1030年には、カロチャ司教座は大司教座に昇格し、エステルゴム大司教座につぐハンガリー・カトリック第二の地位を占めるにいたった。カロチャ大司教領のほとんどはドナウ河左岸、カロチャ南方の湿地帯に散在していた。大司教領でも前出のメルニェ所領と同様に、自経営よりも借地経営主体の所領経営がなされており、所領の多くは大規模借地に出されていた。つぎに、貴族所領の研究としては、当該地域に軸足を置いていたヴェンクハイム伯爵家、パラヴィツィーニ侯爵家、カーロイ伯爵家の研究がある。ヴェンクハイム家の研究は、オラー『19—20世紀の転換期におけるアカスター=ヴェーストウー所領の経営』(1975年)である。同家は1748年に騎士に叙せられ、その後1776年に男爵、1802年には伯爵と陞爵していった。所領は、南部大平原のベ

ーケーシュ県を中心に散在していた。パラヴィツィーニ家の研究にはA・ユハース「パラヴィツィーニ侯爵家世襲財産所領史の諸事実」(1984年)がある。パラヴィツィーニ家は14世紀に侯爵位を得た北イタリア出身の貴族であり、同家のチョングラード県を中心とする主要所領は、1803年にパラヴィツィーニ・カーロイ・ヤーノシュ侯爵未亡人ズィチ・レオポルディナ女伯爵が、経済的に没落したエルドゥーディ伯爵家の領地を購入することによって成立した。当該地域にはすでにカーロイ家の所領が展開しており、パラヴィツィーニ所領と近接することになった。サトマル県ナジカーロイ出身の貴族・カーロイ家の研究としては、ハンゾー「19世紀中葉における南部大平原カーロイ所領の経営」(1960年)とヘルツェグ『19—20世紀におけるカーロイ伯爵家ホードメズーヴァーシャルヘイ所領』(1994年)がある。カーロイ家の経営は13世紀以来、元来の領地であるナジカーロイ周辺地域を基盤としていたが、他方で19世紀になると大平原地域の重要性が増してきた。同家の南部大平原ホードメズーヴァーシャルヘイ所領は、チョングラード県のほか、隣のベーケーシュ県にもまたがっており、1722年にカーロイ・シャンドル伯爵がシュリク伯爵家の旧領を購入することによって成立した。19世紀中葉の当主カーロイ・ジュルジュ伯爵は、セーチェニ・イシュトヴァーン伯爵の民族自由主義改革運動の同志であるとともに、自身も進歩的貴族として合理的な所領経営を試みた。こうして、多くの大平原所領がオスマン帝国のハンガリー撤退後の18世紀から19世紀初頭にかけて成立し、19世紀を通じて整備・拡充されていった。

以上で検討した資料のほとんどは日本の研究史では取り上げられておらず、本研究における様々なファクト・ファインディングは、わが国の従来の研究を補完する有意義な知見になったと考えられる。とはいえ、ハンガリーのものを含めた先行研究の多くは土地制度史的研究であり、個別具体的な所領における企業者活動や、その帰結としての各種生産高の動向といった経営の中味に立ち入って分析したものはほとんどない。ハンガリー資本主義(製粉業)との関連も、充分には解明されていない。これまでの研究成果では各所領とそれらのオーナー族の活動を概観したに止まり、一次史料に基づいて大平原の所領発展メカニズムを立体的に再構成することは今後の研究課題として残された。目下、ひきつづき調査・検討中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 高田茂臣、19世紀ハンガリーにおける鉄道および関連工業の発展―序説―、八木ゼミ論集退職記念号、査読無、2010年、53―64頁。
- ② 高田茂臣、19世紀後半ハンガリー大平原の所領経営、大東文化大学経営論集、査読無、第19号、2010年、83―99頁。
- ③ 高田茂臣、近代ハンガリー所領経営史覚書、大東文化大学経営論集、査読無、第18号、2009年、35―47頁。

〔学会発表〕(計1件)

- ① 高田茂臣、19世紀後半ハンガリー大平原の所領経営、政治経済学・経済史学会、2009年10月24日、岡山大学(岡山県)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高田 茂臣 (TAKADA SHIGEOMI)
大東文化大学・経営学部・講師
研究者番号：30453666